



サードナル
本文… 燻製ねこ
挿絵… 九梨桜 (炙りサーモン)
ゲスト絵… tetsu様
犬鬼マン様

気丈な女軍人の身体と尊厳を
蹂躪し貪り尽くす悪鬼の宴…
絶望の淵で少女は何を想う。

前編のあらすじ

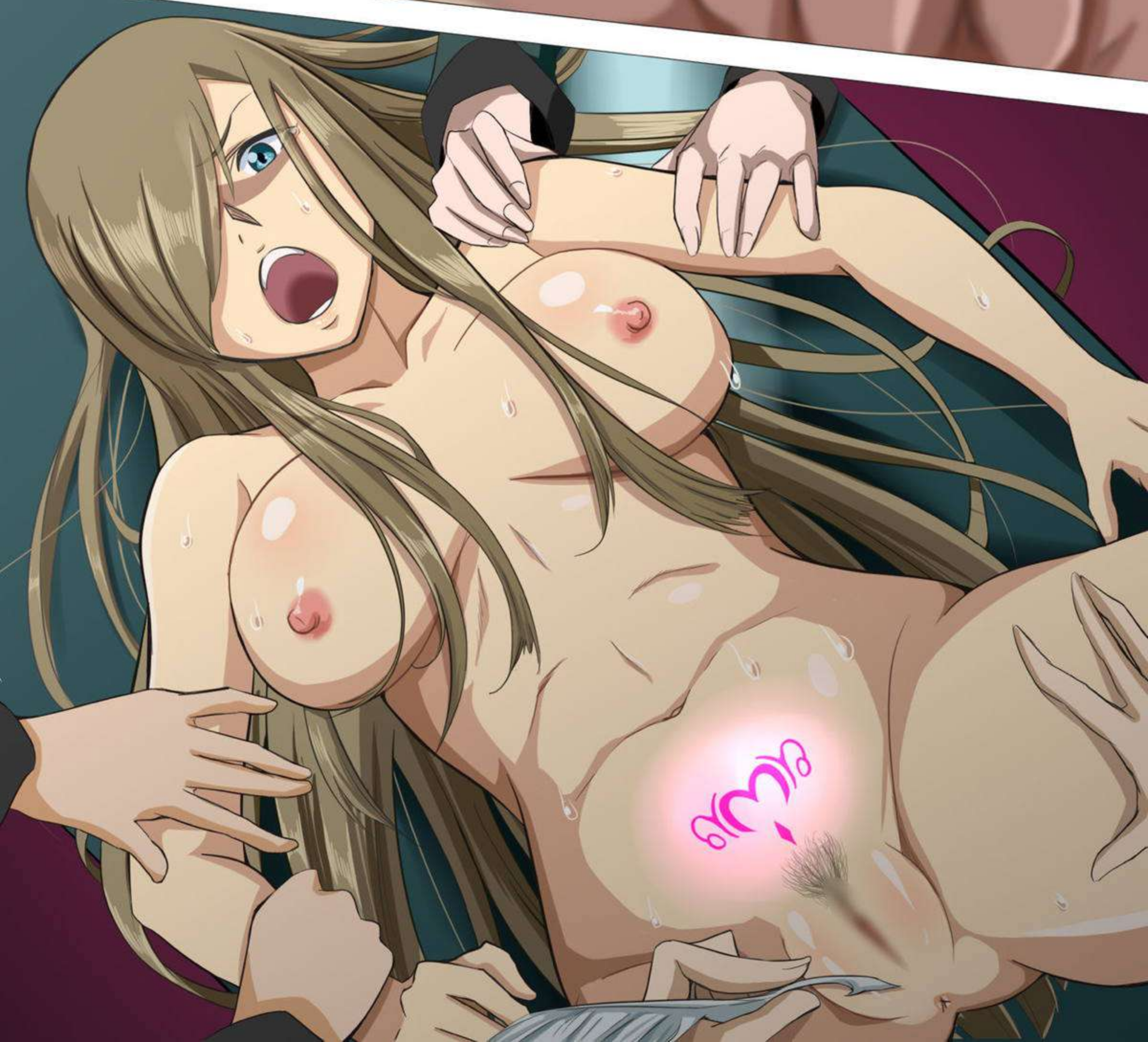
かつてその歌声で仲間とともに世界を救った少女・ティア・グラントは、その後も世界の再建のために尽力する。

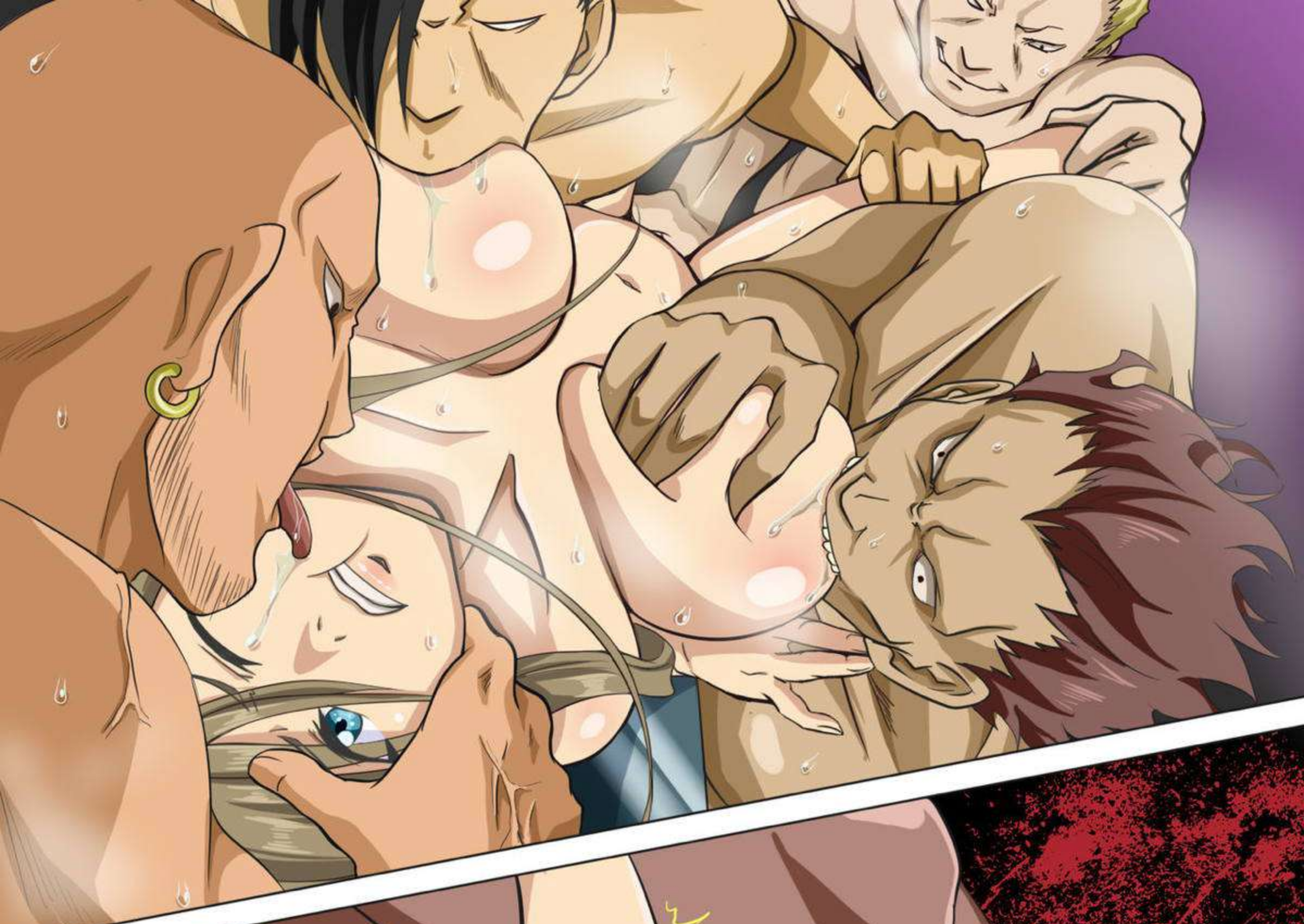
しかし、そうした彼女の献身は悪意ある者たちの理不尽な妬みや憎悪の対象となっていた…。

捕えられたティアは拷問まがいの凌辱と蟲姦によりその身体を汚される

それでも機転により脱出に成功し、多勢をものともせず驚異的な闘いぶりを見せるティアだったが、数百対一という絶望的な数の不利覆すには至らなかった。

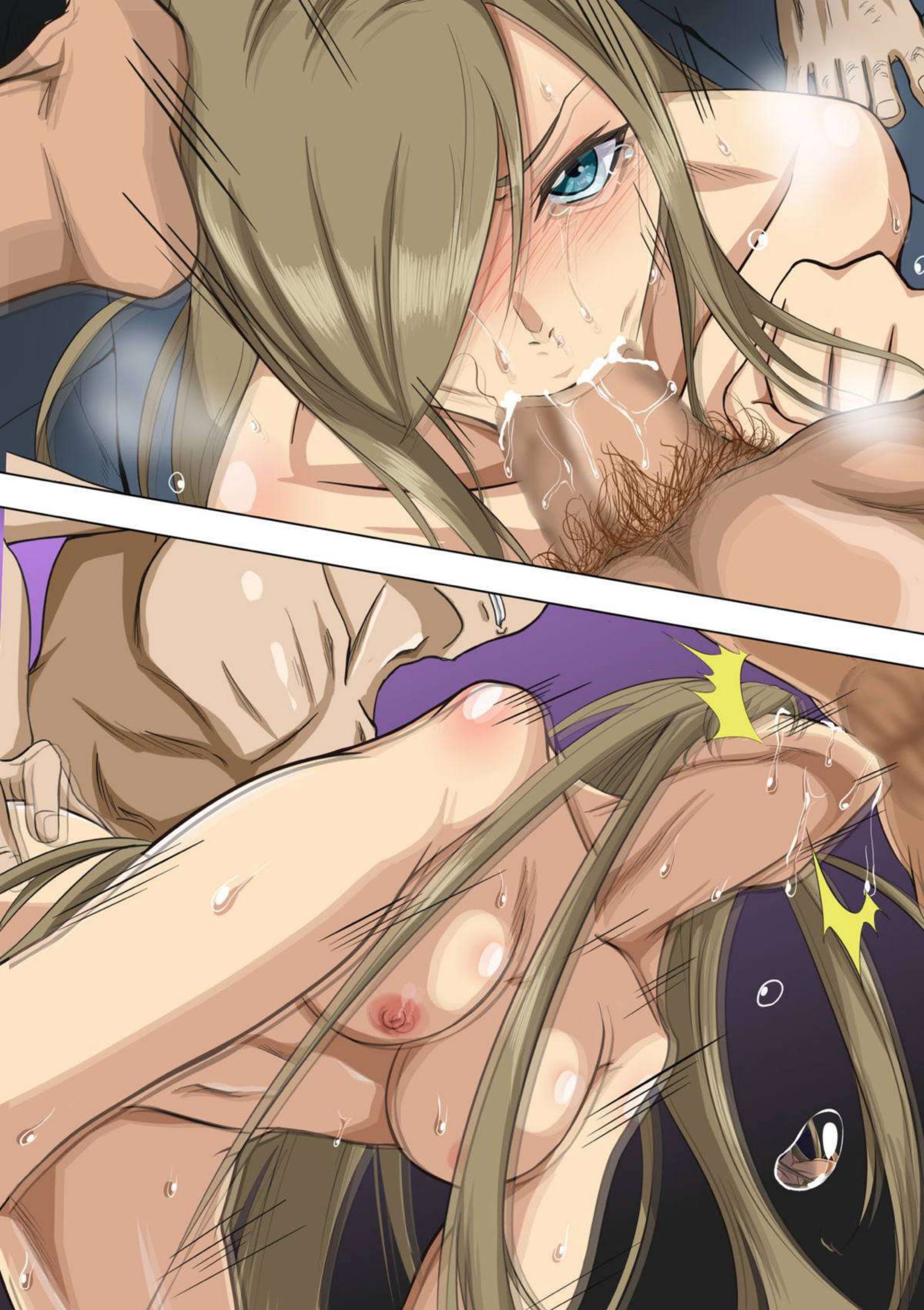
再び捕われたティアは暴力的に蹂躪され、その美しい肢体を以って数百の男の嗜虐的な欲求を満足させるのだった…。

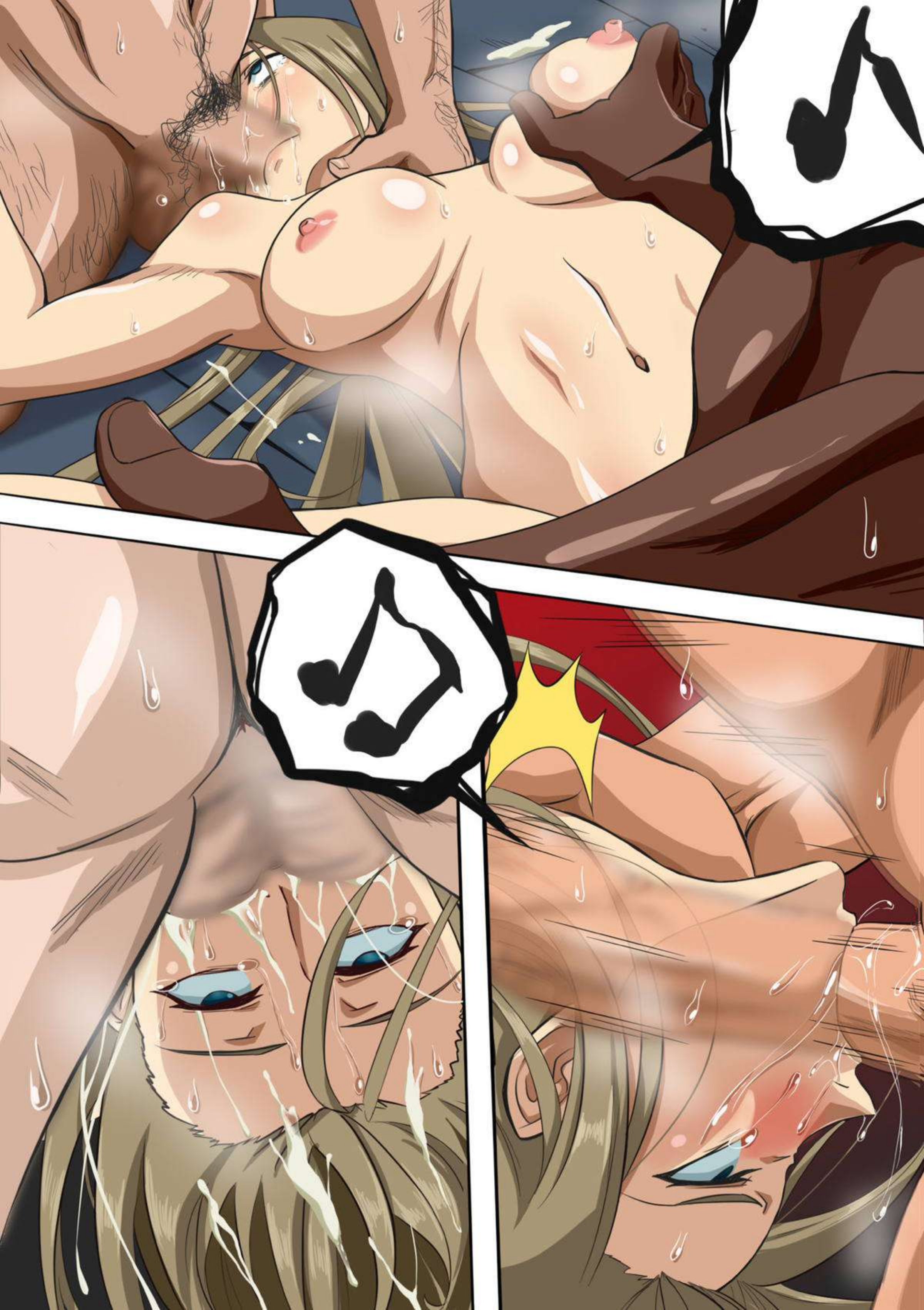






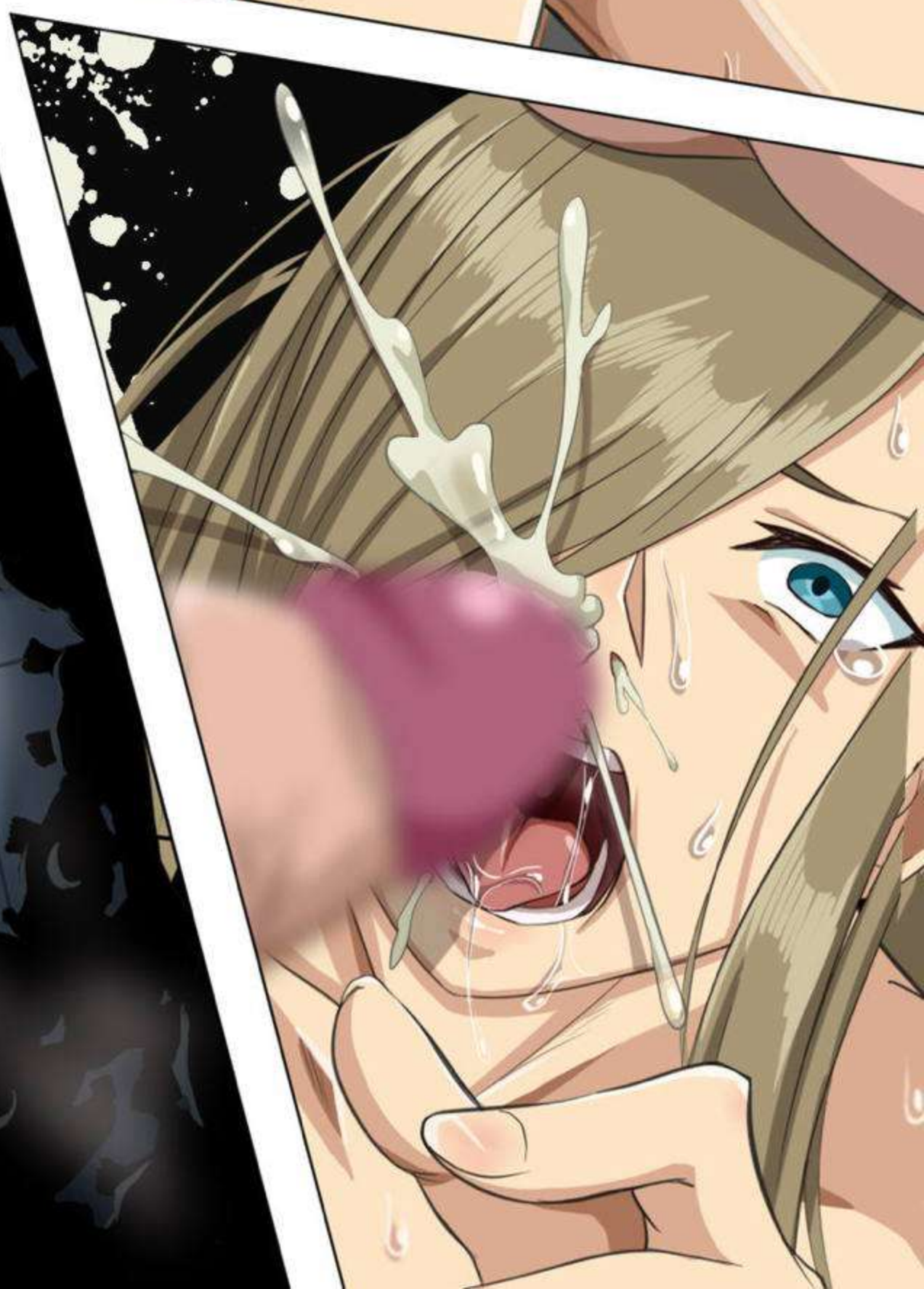
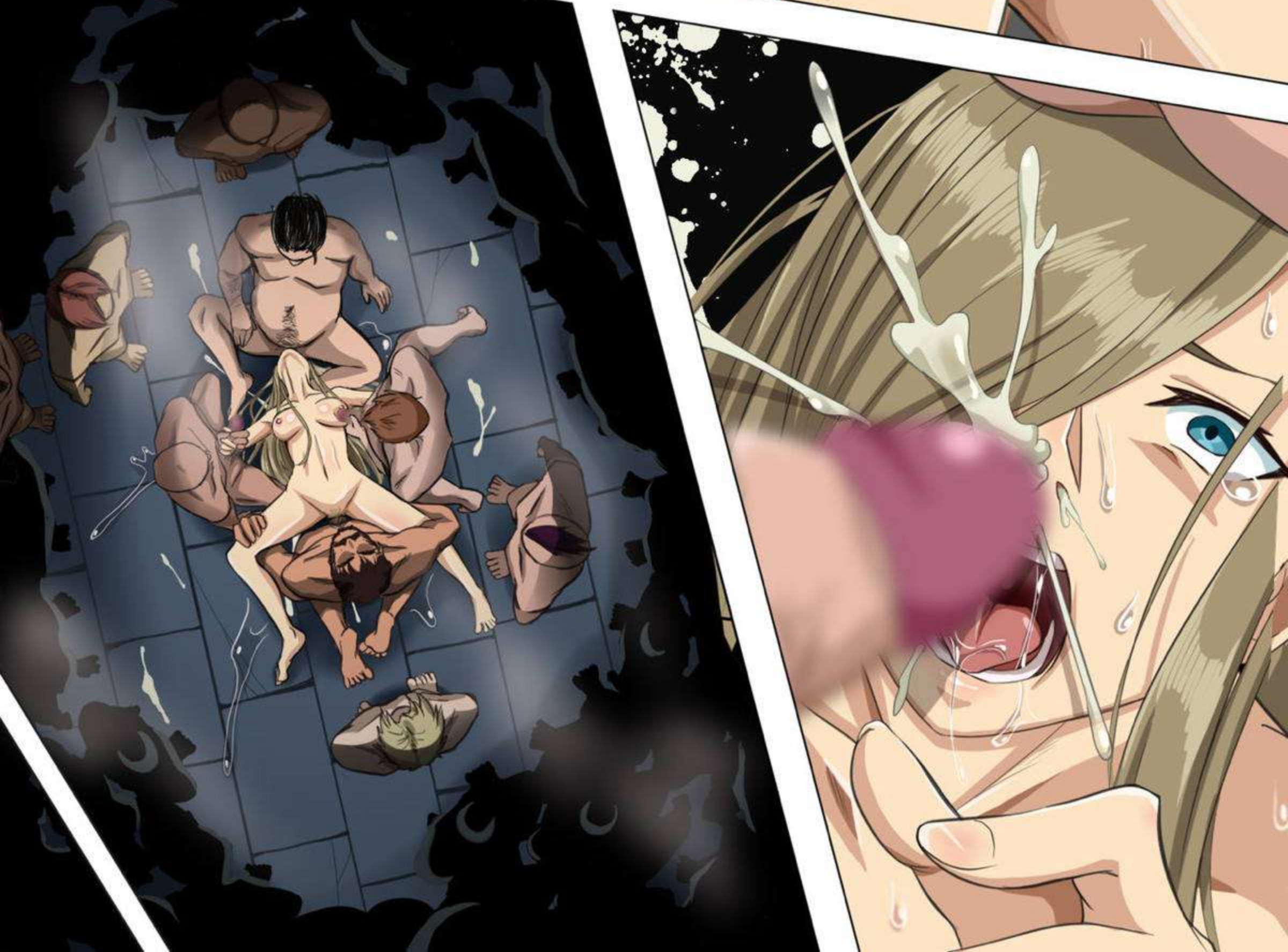


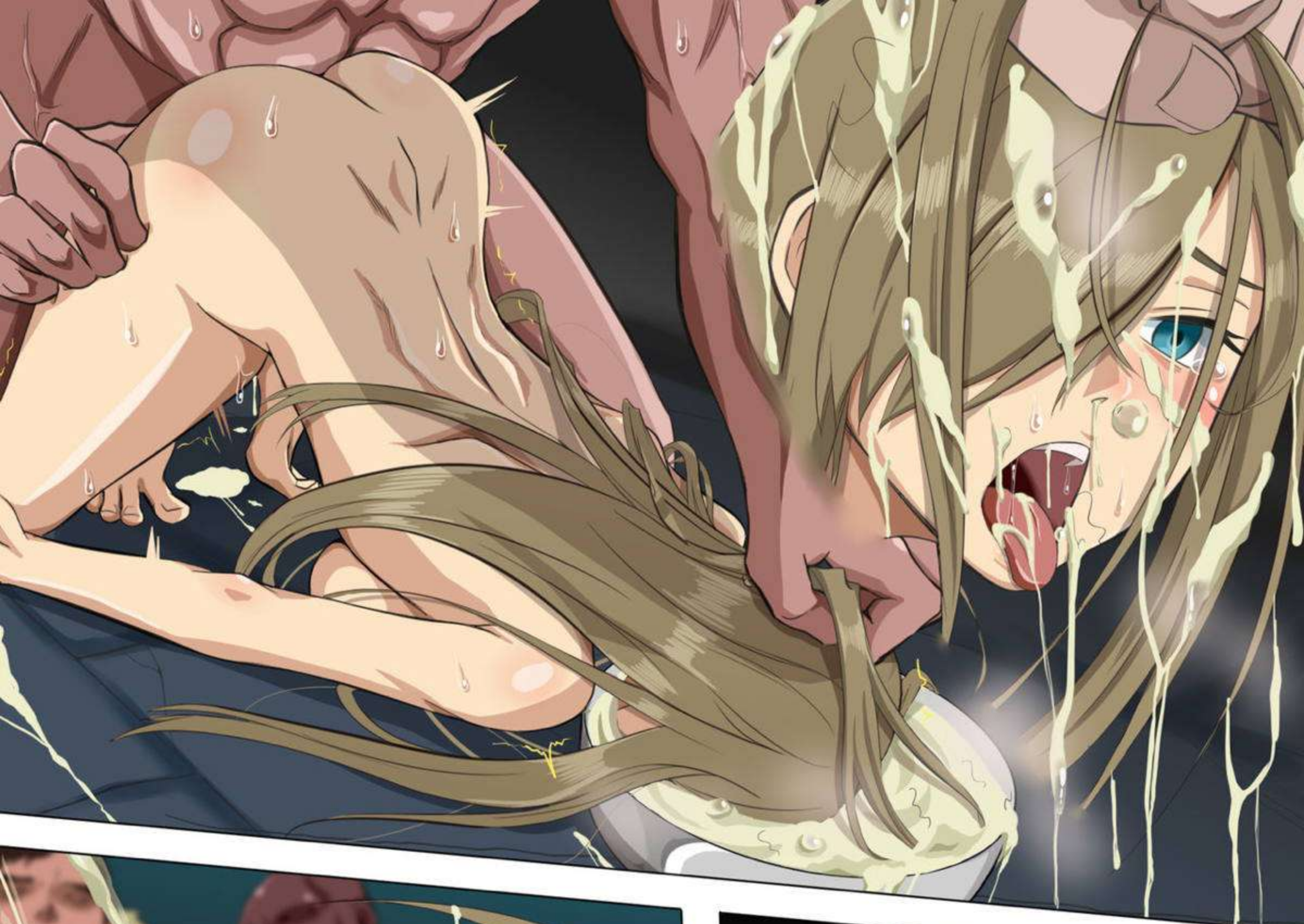


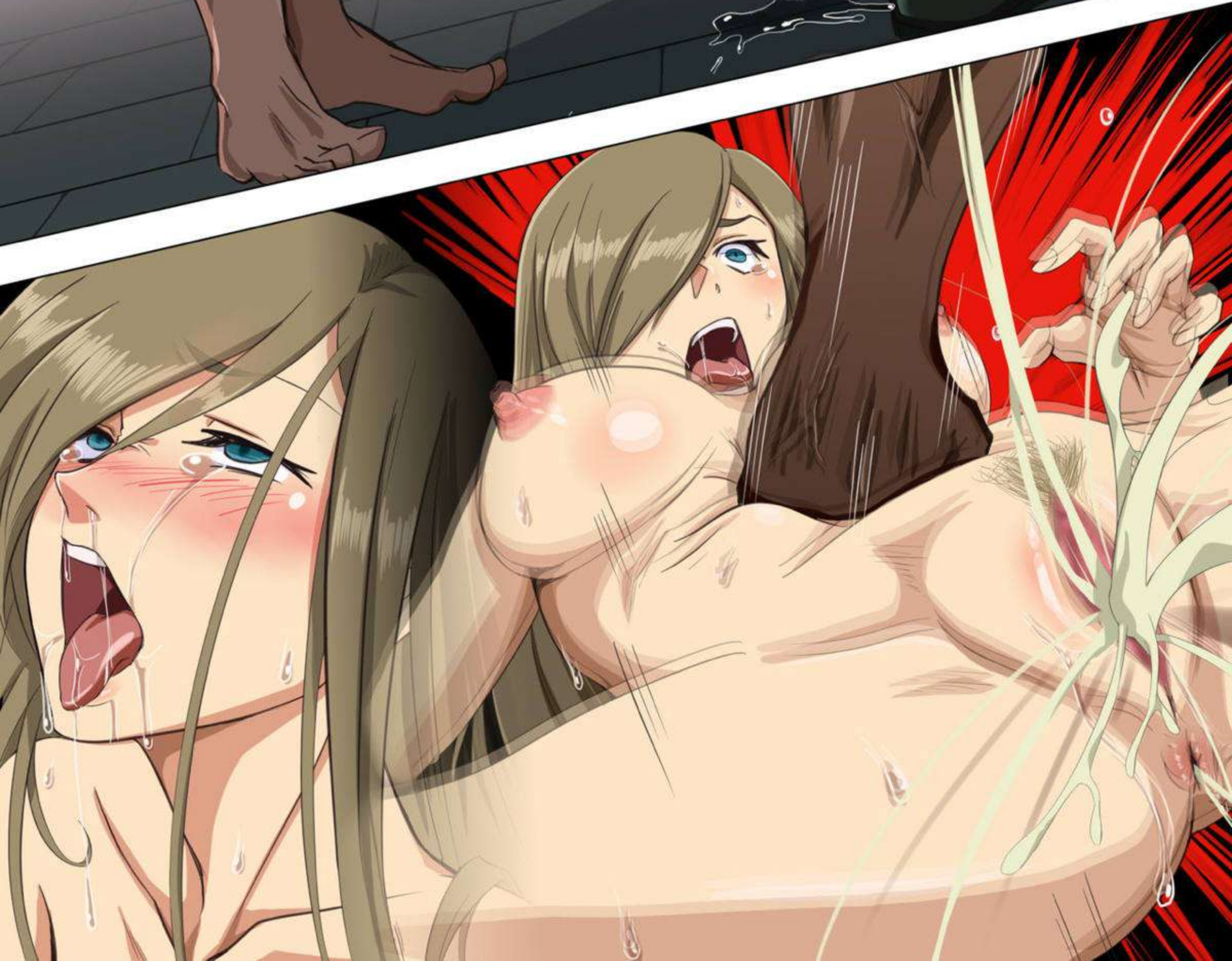




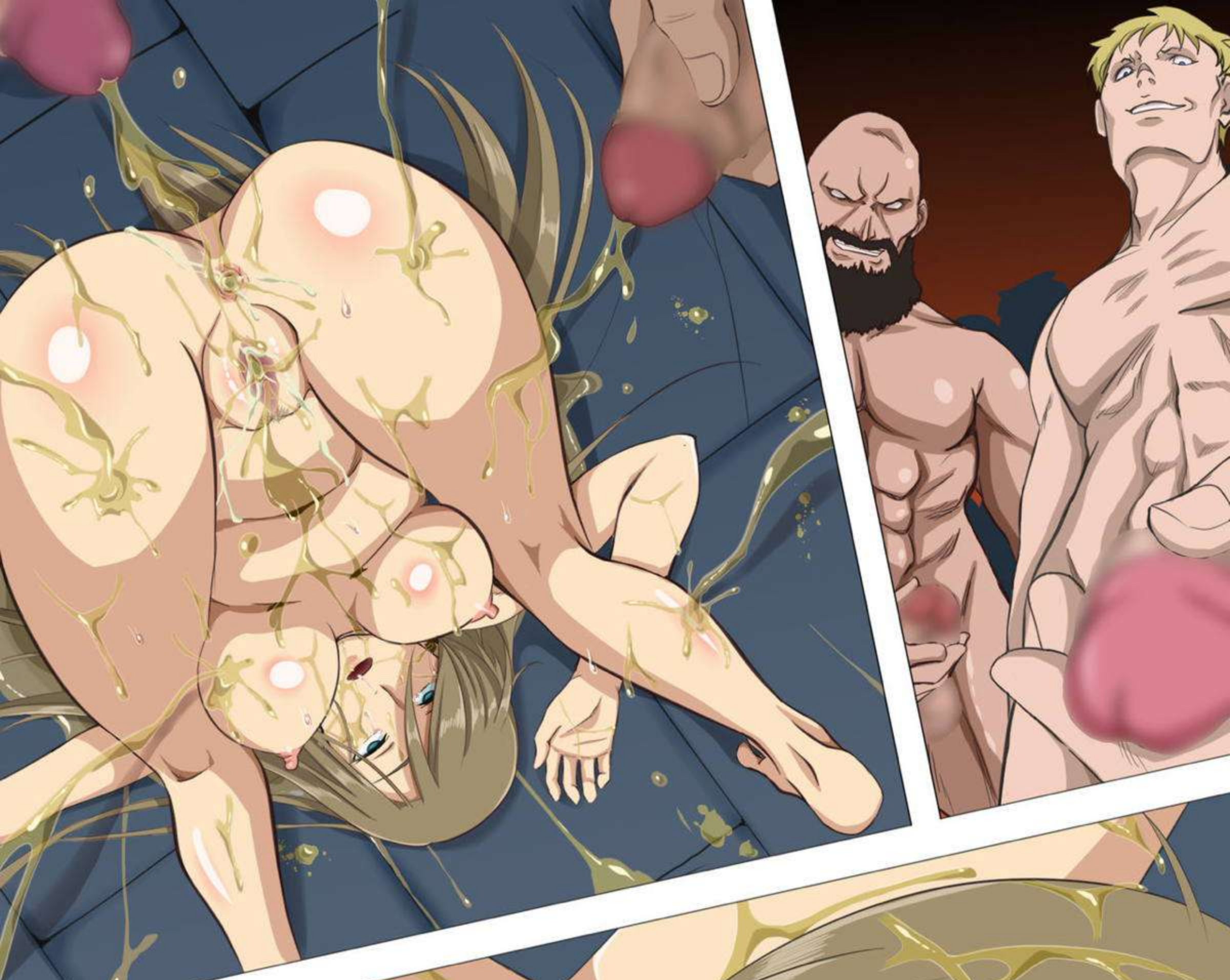






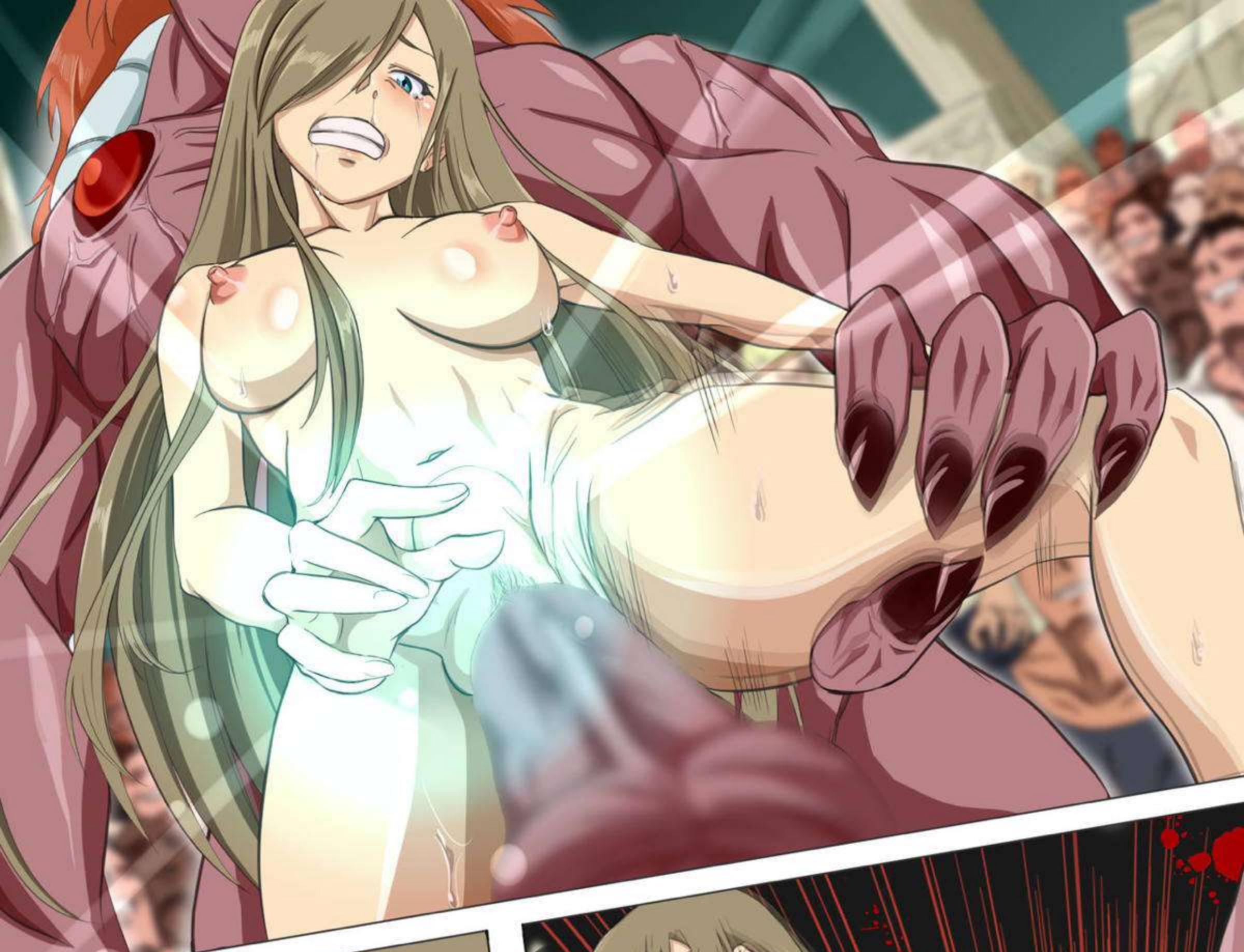






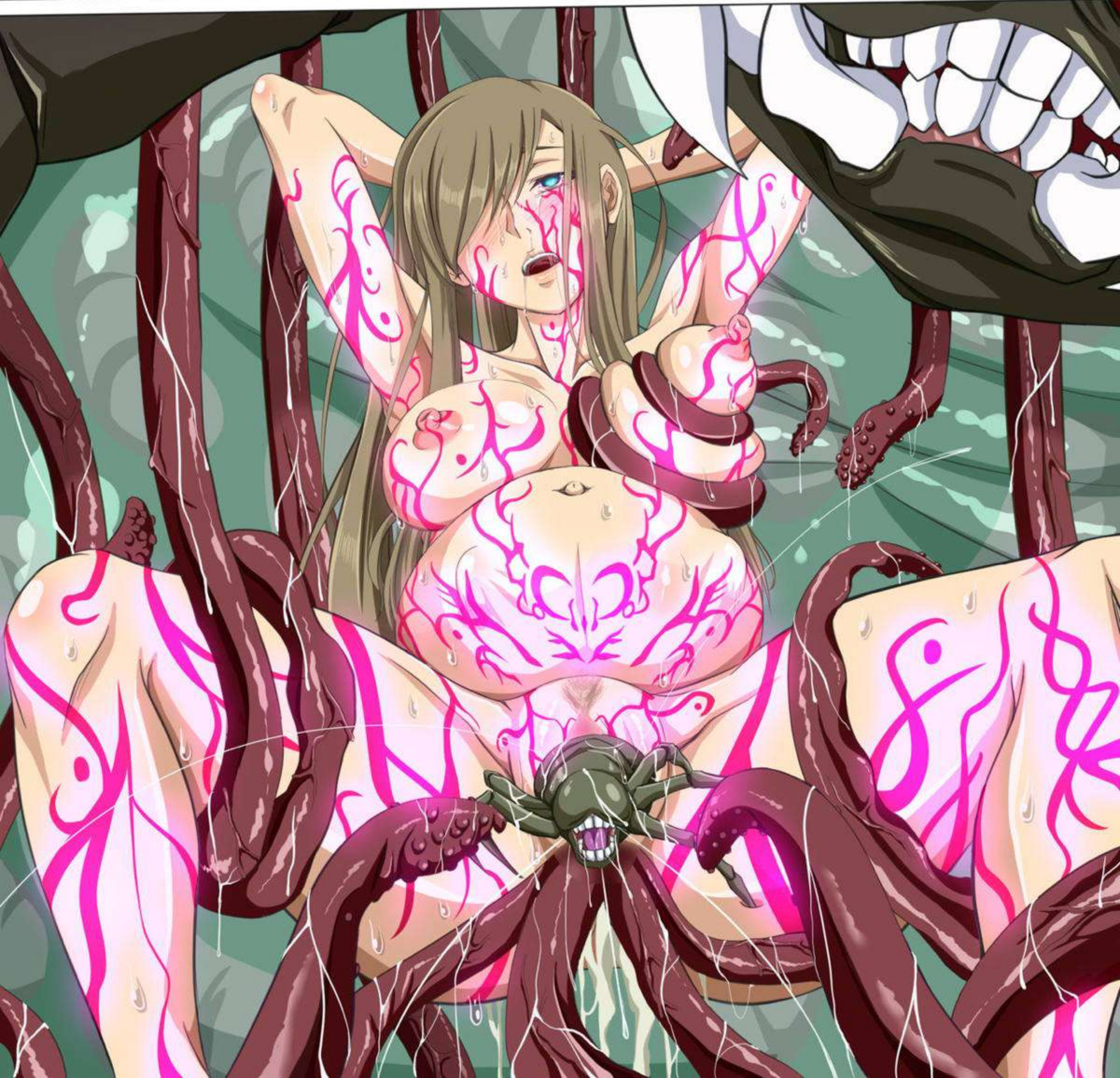
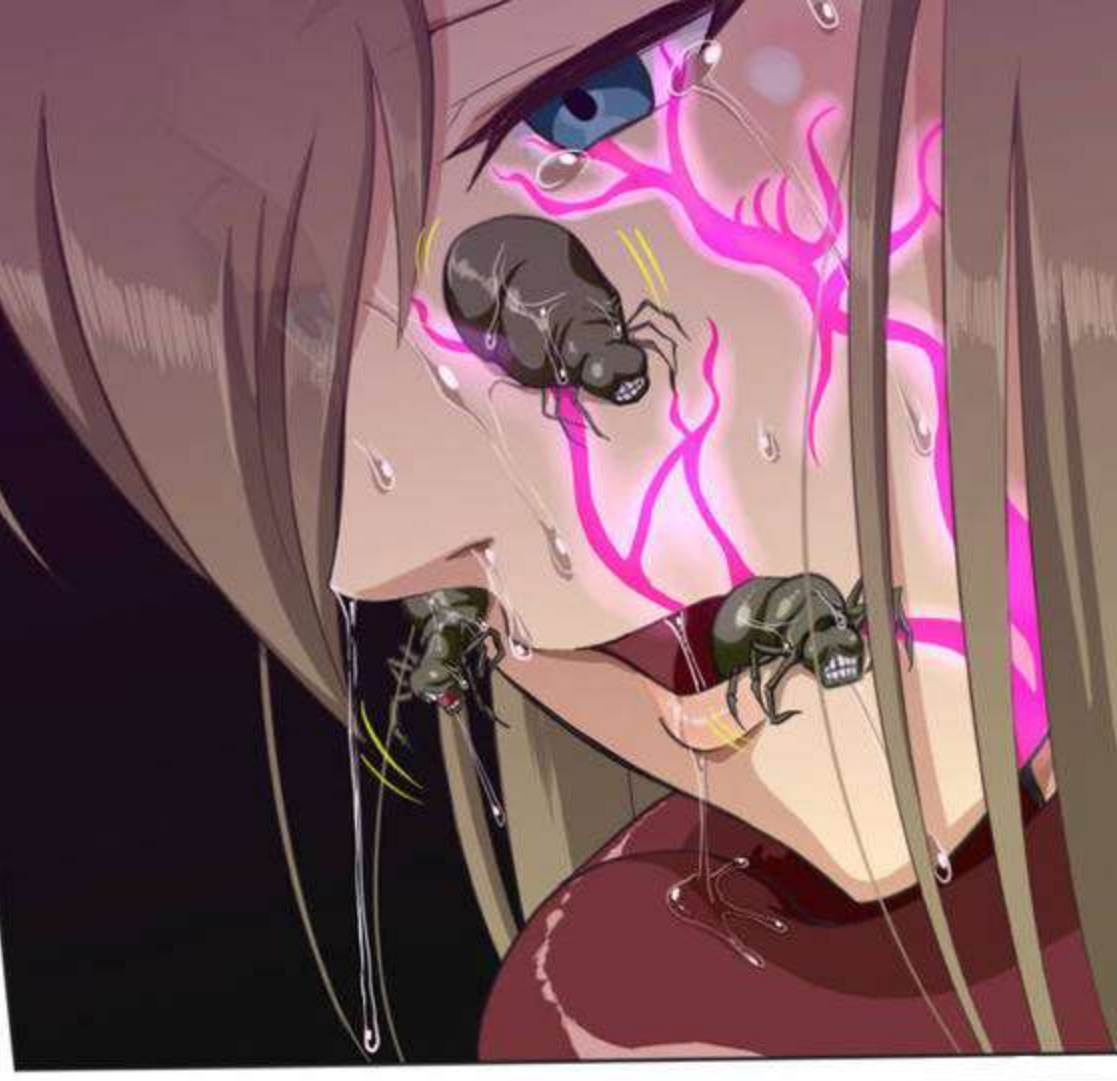




















よーく見ると























チツ、折角の上玉
だつてのに、「荊」
の呪いとやらで
抱けねえとはよお。

まあ、その分この
可愛らし口で存分に
楽しませてもらおう
じゃねえか。

クツ：
勝手なことを…。



別に逃げてもいいぜ？
仲間がどうなっても
いいつてんならよ？

……っっ！！

安心しな、その樽が
金貨で一杯になるまで
稼いでくれりや、
全員解放してやるよ。

…約束は守って
もらおうわよ……。

ア……

しっつかしクールな様に
見えて仲間思いじゃん。
必死にチンポしやぶつて
やがるぜ。

んっぶっ！

フッ

フッ
フッ
フッ

フッ
フッ
フッ

フッ
フッ
フッ

フッ
フッ
フッ

あゝそういうの
いいねえ。
そそられるわ、
さつさと変われよ。

フッ

んっんっ！

クツ…こいつら、
今に見ていなさい。
隙を見て…

でもやっぱ奉仕ってんなら、喉奥まで使ってもらわねとなあ！
こっちはやっつけてよお!?

おじやいおい、やりすぎ
喉がちね？こ形にぞ。
もりがあがつてんぞ。

ぶぐおおおううううう!!

んっ、ぐおっ!!

うお、
イク、

おおおつ!!
イクっ!

ぶっ、
んんんんむっ、
ぶっ、
ぶっ!!

ウソ……でしよ……!?
私の……口……に……
精液が……っ……!!

あゝ出る出る……。
やっば鼻っ柱強い
女の喉に出すの
キモチイイ♪

んおごっ……おっ……!

こ、こいつ……
なんて量出すのよ!!
わ……たし、精液で……
溺……れて……!

ドゥ
ドゥ
ドゥ

オィオィ、折角の
美人なのに
美し……つ……不細工な
顔……してんだよ!!

ぶおごっ……
ぶおお……!!

グ
グ
グ

グ
グ
グ

グ
グ
グ

グ
グ
グ

いやあシオンちゃん
ご苦労様。の音も
もうグウの音も
出ねえか？

う……あ……。

ヒュー

ヒュー

ド
ロ
オ

俺ら鬼畜
すぎじゃね？
ヒヒッ。

じゃ、俺らは
これからの金で
遊んでくるからよお。
また一からヨロシク♪

お……。



















何の感慨も無く無慈悲に触手は彼女の股間を貫いた。普段どんな攻撃を受けた。多に声を上げないミラが、この時は女らしい悲鳴を上げる。



内部を貫かれる痛みはこれまでの痛みとは全く異質だったのだろう。結局合部から、処女の証である鮮血が流れ落ちた。

ガッガッ!!

グッグッ

痛みにも震えながらも
ミラは僕に哀し気な眼
で微笑みかけた。

「すまないな…こんな
形で初めてを失って
しまおうとは…せめて
君だけでも無傷で助
けるぞ…！」

僕はこんなにも自分の
無力を呪ったことはない。
最愛の女性が汚されなが
もなお僕のことを気遣
てくれていているのに、
それを見ているだけに僕
できないのだから…。

しかし、今のこの惨状
すら、魔物の悪趣味な遊
戯の始まりに過ぎなかつ
たことを僕は思い知る。

異様な形状の触手は彼女の乳の先端に取りつく。ミラの身体がビクンと痙攣し、その目が見開かれる。

恐らく彼女の乳首にはあの営利な突起だが、深々と刺さっているだろう。

口から入った触手は喉に留まらず、彼女の奥深くを蹂躞しているのだ。

しかし、ミラにはその痛みに気を取られる自由すらなかった。彼女の程よく筋肉のついた美しいお腹が喉と同じように歪みに蠢く。



下品な音を立てて
ミラの肛門から触手
の先端が突き出る。
彼女は白目を剥き、
声にならない悲鳴を
上げた。

ビクッ
ビクッ

あゝ
!!!

グビッ
グビッ
グビッ

僕は必死になって叫ん
でいた。止めてくれと魔
物に懇願した。しかし殆
ど知性の無い魔物は、僕
の言葉など全く意に介す
ることはない。

病的な痙攣を繰り返す
ミラの身体と同調するよ
うに触手もプラプラと揺
れる。彼女の体内を通っ
てきた触手は汚物で少し
汚れていた。

汚物に塗れた触手は
何の躊躇も無くその先は
端をミラの膣にねじ込
んだ。

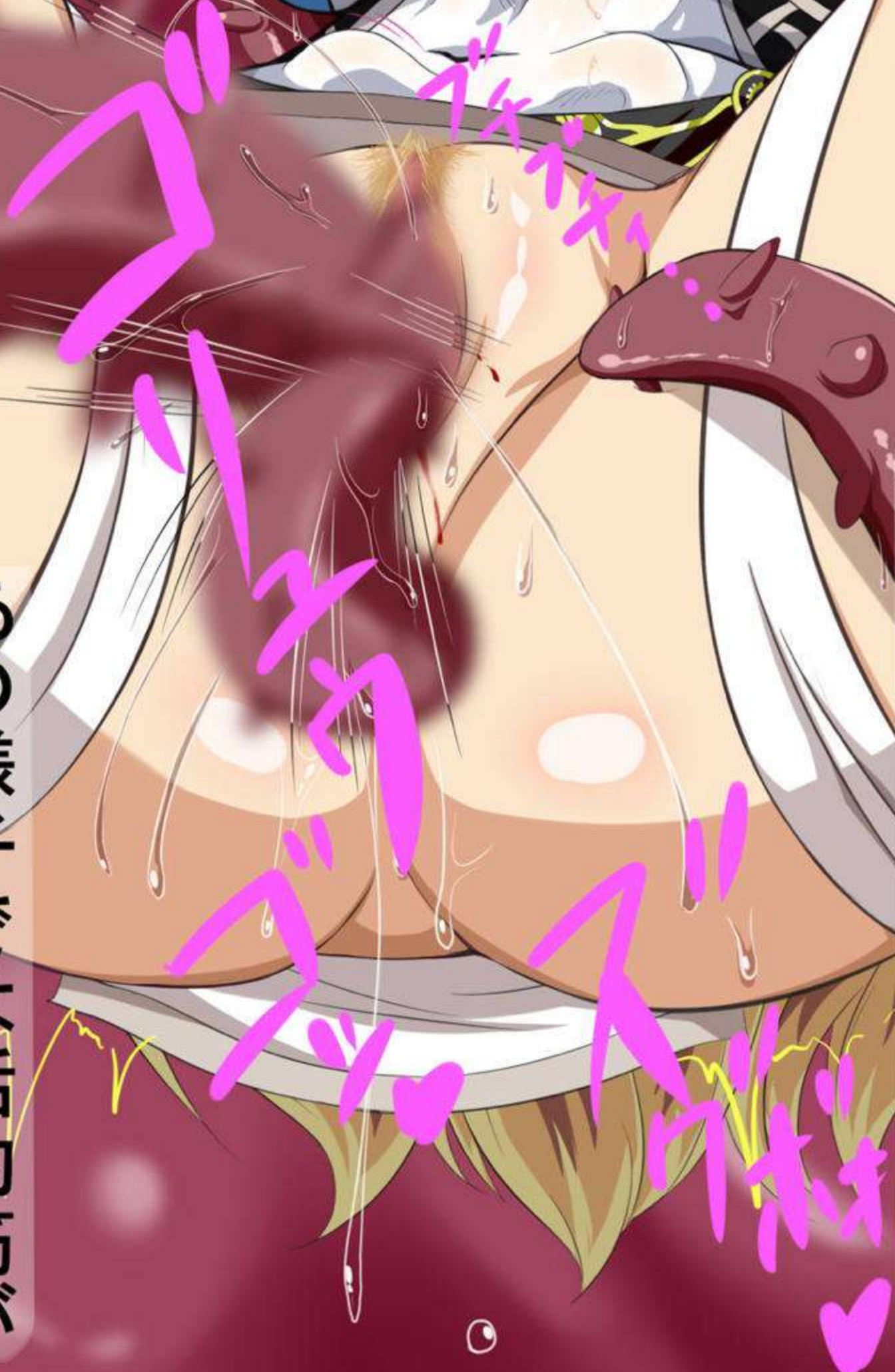
ブルブルッ

んげん...

んげん...

彼女の膣には元から極太
の触手が入っているのに、
二本入って触手の抽挿はよ
り激しさを増していった。

あの様子では括約筋が
千切れていてもおかしく
はないだろう...。ミラが
壊されていく...



触手が一際大きく震えたかと思うと、次の瞬間触手がミラに精液を注いだ。

それはまるで壊れた蛇口に繋がれたホースが放水して、夥しい量の汚濁が、間欠泉の如く逆流する。

漸く触手から解放された乳房からも母乳が噴出して、白目を剥き、鼻汁や涎が垂れ流されたその顔は、女性としての尊厳を全て奪われたと言っている。

胸が締め付けられるような光景だった。しかし、何故だらう。僕の股間は無惨な彼女の姿を見て、痛いほどに屹立していた。



魔物の胎内に大精霊
だつた者の獣の如き嬌
声が響き渡る。

あれから数か月…。ミラ
が出産した魔物は優に三桁
を超えらる。もう殆ど正気は
残っていない。だろ、それが
でも僕のことだけは覚えて
くれてる。

人間である僕の命はもう
尽きようとしている。が、
精霊の彼女はこの魔物がエ
ネルギーを供給する限り死
ねない。

僕が死ねば、彼女の心も完
全に壊れる。だろ、それが
彼女の唯一の救済。ああ、ミ
ラ。無様でも。キレイ……。



















